



鹿島祭りの行列（深浦町大間越 平成19年）

青森県の南西端に位置し、日本海に面した深浦町（旧岩崎村）の松神（まつかみ）・黒崎・大間越（おおまこし）の三集落には、「鹿島祭り」という県内ではここだけで行われる行事がある。初夏の頃、災いを海に流し、

豊作と大漁、集落の安泰を祈願するもので、虫送り系の行事といえよう。大間越地区では1ヶ月も前から、後に海に流す「春日丸」を、シナノキかサワグルミの丸太をくり抜き、つ弁財船（べさいせん）、つ

鹿島祭り

清野耕司

（県民生活文化課

県史編さんグループ

主幹）

まり江戸時代の北前船を模して作る。大きさは、全長が5尺6寸（約1・7メートル）、幅が1尺6寸（約50センチメートル）と古くからいわれている。春日丸の船乗りたちは、7体の木と藁でできた体長40センチメートルほどの人形である。人形は地区内の班長さんが作ることにしているが、この人形に住民の災厄を添

切り出した御幣を振り上げて、「アーラ、エンヤラ、エンヤラ、エンヤラ、ホーイ」とかけ声を発すると、タチフリの踊り手たちも右手に持った太刀を高く挙げて「エンヤラ、エンヤラ、エンヤラ、ホーイ」と応じる。これが合図となって、サキフリが「アッ、シツチョイ、シツチョイ、シツチョイ、シツチョイ」と音頭をとりながら進み、タチフリも

古くから脈々と受け継がれている、かけがえのない祭りである。これに似た行事は、秋田県に多く見られ、この三集落に接する秋田県山本郡八峰町にも、鹿島祭り（鹿島流し・鹿島さまともいう）がある。秋田県内には、他にも「鹿島」と名のつく多様な行事が広く分布する。鹿島といえば、茨城県の鹿島神宮は、古代から航海をつかさどり守護する神、中世から近世にかけては軍神・武神として崇拜され、武士の信仰の対象ともなった。また、さらにその強力な神威から、天災や疫病などの災いをもたらす悪霊を退散させる神としても広く信仰を集めた。この強い神の名を冠した祭りが、遠く離れた秋田や青森にまで存在している。江戸時代、常陸（現在の茨城県）の佐竹氏が秋田へ国替えになったことが関係しているという説もあるが、十分な証拠はそろっていない。

加して、流してしまおうというわけである。

と気合いを入れると、タチフリは2人1組となり、体を入れ替えながら太刀を強く2回打ちつけ合う。基本的には、これを一区切りとした所作を繰り返して行列が進んでいく。沿道の各家からは祝儀や神酒が上がる。夕方、行列は砂浜に到着し、春日丸とタチフリの太刀を海に流すのである。地区の住民や近隣の人が若干見物に来る程度の行事だが、

サキフリが色紙を重ねて

6月上旬の昼下がりに出発した行列は、何ヶ所かのフナヤドと呼ばれる家で休憩をとりながら、地区内をくまなく練り歩く。先頭はサキフリと呼ばれる音頭取りで、次にタチフリ（太刀に見立てた木の棒を振る踊り）、春日丸、囃子方と続く。

サキフリが色紙を重ねて

見物に来る程度の行事だが、